

シンポジウム「基礎構造と相互作用」を聴いて

(一社) 基礎構造研究会代表理事 杉村義広

昨日行われた第 10 回構造物と地盤の動的相互作用シンポジウム「基礎構造と相互作用」を聴いた。この種のシンポジウムは、よかったという感想を持つ一方で、たいしたことはなかったとの失望感の二つを同時に持つことが多いが、よかった方から言えば、筆者が若い頃から動的相互作用と基礎構造両方の分野の交流が必要であることは言われていたが、それぞれ学問の発達に忙しく、なかなかうまく交流の機会を作れなかった状況が続く中で今回実現したという点である。ただ、それがそのまま残念ながらたいしたことはなかったとの感想にも繋がることになった。両者の交流が必ずしもうまくなされているわけではない現実が示されたからである。これを切っ掛けにして、今後はこのような試みを続けていくことが大切であるということであろう。

中味については、たしかに検討が必要と思われる点がいくつかあって、少し時間をかけてこの通信でも考えて行きたいと思っているが、ここではそれとは別に単純に指摘しておきたいと思った感想があるので、それについて記しておくことにしたい。解析モデルについて Penzien モデル、ペンツエンモデル、ペンゼンモデルなどいくつかの表示法が出て来てそれぞれ別のモデルなのかと思わせるほどであったので、統一した表示法を考えた方がよいのではないかという点である。

それについては、筆者が若い頃に UC Berkeley に Research Associate として留学し、どちらかというと学生たちが雑然としてたむろしているキャンパスと、少し離れた Richmond にある、こちらは静かな環境の Earthquake Engineering Research Center を行き来して、コンピュータの解析結果をいろいろと検討していた (FORTRAN でコードしたカードを読み込んで計算結果を心待ちしていた) 思い出が蘇ってきた。その時には 3 次元地震動のテーマで、カリフォルニアでの地震記録から地中部のひずみがどの程度になっていたかを類推する研究をしていたのであるが、UC Berkeley を留学先として選んだのは建研時代に Penzien モデルを勉強し、杭基礎の地震応答を求める試みなどを中味とする学位論文を書いたことがあったからである。

Penzien 先生は、大学で最初の出会いの時に“コンピュータは好きなだけ使ってよい”と言ってくれた後、世界を忙しく飛び回っていたので学内で逢うことはそれほど多くはなく、むしろ少なかったという方が正しいが、その少ない機会のあるときに“Penzien はどのように発音するのですか”と聴いたことがある。若い者に対してもふくよかな笑い顔で声をかけてくれる先生が“ペンジエン”と応えてくれたのである。ドイツ語的ではなく、英語的な発音であった。それ以来、筆者はカタカナ表示をするときには“ペンジエン”と書くことにし

ている。ペンジエン先生は今では故人となってしまったが、苗字なので本人の発音に近い表示をすることが故人への礼でもあると思えるので、呼び方は統一されればよいと考えている。

ペンジエンモデルの生みの親となった **EERC** の報告書は、実際には研究グループの若い研究者が大部分を担当したのであるが、研究代表者がペンジエン先生であったので、それに敬意を込めてペンジエンモデルと呼ばれようになったと思われる。この国にペンジエンモデルを紹介する一端を若いときの筆者も担っていたことも懐かしく思い出していたのである。